

うになる。ディランという名前は、20世紀を代表するウェールズの詩人ディラン・トーマスからとったという。

20歳の冬に大学を中退し、ヒッチハイクをしてニューヨークにたどり着き、グリニッジビレッジ界隈に出入りするようになる。当地で最先端の芸術家たちと交流を持ちながら、歌づくりのコツをどん欲に吸収する。やがて仲間内で評判が高まり、有望なフォークシンガーとして頭角を現していく。

そして、1962年、『ボブ・ディラン』というタイトルのアルバムでレコードデビューを果たす。オリジナル曲がたった2曲で、あとは先輩シンガーたちのカバー曲などで占められていた。セールス面では全く振るわなかったが、コンサートには多くのファンを集めメッセーj性の強いオリジナルソングを披露するようになっていく。

ディランが世間一般で注目されるようになったのは、セカンドアルバム『フリー・ホイーリン』あたりからである。このアルバムに収められている「風に吹かれて」が当時人気を博していたフォークトリオ、ピーター・ポール・アンド・マリーに取り上げられ、大ヒットし、作者のディランにも注目が集まったのである。アルバムには、この曲以外にも「北国の少女」「戦争の親玉」「はげしい雨が降る」「くよくよするなよ」といったフォークソングの傑作が収められている。

「風に吹かれて」を激しく政府を批判した反戦歌だと思って聴くと拍子抜けするかもしれない。「いくつの砲丸が飛び交わなければならぬのだろう。それらが全面的に禁止されるまで」「いくつの死に出会わなければならぬのだろう。あまりに多くの人が死んだことに気づくまで」などと鋭く問いかけておきながら、「答えは、風の中、風の中に吹かれている」という突き放した答えしか用意されていないのである。

ディランは、もっと直截的に戦争や人種差別に反対する歌を作っているが、この曲の中にこそ彼の本質が隠れている。彼は、歌を唄うことが好きで、自分の歌を大衆に聴いてもらうにはどうしたらいいのかを常に考えてきた。当時の時代の空気を鋭く感じ取り、反戦歌を唄うと、みんなが真剣に聴いてくれることに気づいた。だから、一心不乱に反戦歌を作り、ステージで聴衆に訴えかけた。その出来があまりに素晴らしく、説得力に溢れていたため、彼はフォークの旗手として名をあげてしまったのである。プロテストシンガーとしてのディランの人気は、次作の『時代は変わる』で頂点に達する。

このような事情で、ディランは、プロテストソングの作り手として、その歌手人生をスタートさせた。しかし、本人が何度もインタビューで語っているように、反戦運

動家・人権運動家としての自覚は全く持ち合わせていなかった。確かに、社会の不正義に苦しむ人たちに寄り添った曲や、戦争・人種差別に反対する人々を力づける曲を何曲も生み出してきた。しかし、周りが自分を抗議運動のリーダーに祭り上げようとしたとき、「それはごめんだ」と断固拒否する。そして、もっと魅力的な世界、より多くの観衆が喜んで聴いてくれるロックミュージックに出会ったとき、彼は颯爽とそちらの世界に踏み込んでいくのである。

3. ロックシンガーへの転身

フォークシンガーとして絶頂期を謳歌していた1964年、ディランは『アナザー・サイド・オブ・ボブ・ディラン』を発表する。「自由の鐘」「マイ・バック・ページズ」「悲しきベイブ」など、後に多くのアーティストがカバーする名曲がキラ星のごとく並んでいる。相変わらずフォークギター中心のスタイルだが、これらの曲がロックスタンダードになっていくことから分かるように、すでにロックのリズムと気分が内包されていた。

この当時、ビートルズやローリング・ストーンズなどのイギリスのロックバンドがアメリカのヒットチャートを席巻していた。ディランは彼らと個人的な交流を持ち、ロックの激しいビートとエレキギター中心のサ

ウインドが人々を魅了する瞬間に立ち会った。そして、1965年に発表された次作『プリング・イット・オール・バック・ホーム』で、ついにデイランは、エレキギター演奏を導入する。ステージでもロック風に変化した演奏を披露するようになるが、これが保守的なフォークファンたちを刺激し、異常な反応を引き起こす。

1965年「ニューポート・フォーク・フェスティバル」に、ロックバンドを従えて登場したときには、ギターの弾き語りによるメッセージ性の強い歌を期待していたフォーク信者たちから罵声とブーイングを浴びせられ、演奏を中止せざる得なくなってしまう。彼は、いったんステージを降り、フォークギター一本を抱えてステージに戻り、涙ながらに弾き語りを数曲歌ったという逸話が残されている⁴。

また、翌年の「ロイヤル・アルバート・ホール」のコンサートでも、ロックバンドを引き連れエレキギターを抱えて登場したデイランを見て、会場全体がブーイングの嵐に包まれる。曲間には、客席から「ユダ」という声が飛び、会場のあちこちで拍手が起こる。ユダとは、言うまでもなくキリストを裏切った使徒の一人のことである。デイランは、この野次に対して「お前らなんて信じない。嘘つきだ」と言い放ち、怒濤のロック演奏を繰り広げる。このときの

緊張した模様をドキュメントした映像は、現在DVDで発売されていて確認できる。純真なフォーク信者にとって、ロックの背後にあるショービジネスの世界は、金儲け主義に支配された穢れた世界であった。デイランの行動は、社会を変えるパワーを持つフォークという神聖な存在を裏切る行為に映ったのであろう。

しかし、フォーク信者たちの反発をもとめせず、デイランは、『追憶のハイウェイ61』『ブロンド・オン・ブロンド』と、ロック史に残る名盤を次々と発表し、ロックシンガーとしての地位を築いていく。有名なロック雑誌『ローリングストーン誌』は、「歴代名盤500アルバム」の中で、居並ぶロックアーティストの名盤を押さえて、『追憶のハイウェイ61』を4位、『ブロンド・オン・ブロンド』を9位に選出している⁵。

『追憶のハイウェイ61』のオープニングナンバー「ライク・ア・ローリング・ストーン」は、ロック史に残る圧倒的な名曲である。先述の『ローリングストーン誌』は、これまで生み出されたすべてのロックソングの1位に、この曲を挙げているほどである。この曲の第1の美点は、ロック界に影響を与えた革新的なサウンドである。デイランとロック畑の名手たちが作り出すサウンドは、ポーカーと楽器、楽器と楽器の間に緊張を孕みつつ、トータルでは音が一体化

して響くというマジックを生んでいる。このサウンドは、当時「フォークロック」と呼ばれた。デイランが発明したフォークロックサウンドは多くの若手ミュージシャンを魅了し、「デイランズ・チルドレン」と呼ばれるフォロワーを生み出すとともに、ロックのサウンドプロダクションに計り知れない影響を及ぼした。

第2の美点は、曲と歌詞の融合である。曲を聴いていると、かなり強引な韻を踏んで、言葉が機関銃のように耳に飛び込んでくる。その歌詞は、現代詩としても成立するような難解かつ幻想的な言葉の連なりで作られており、これまでのロックとは次元が違う高い文学性を備えていた。ロックのリズムと詞の韻が完璧な形で相乗効果を生み出し、ロックの肝である「ノリ」を生み出している。文学的な香りを放ちつつ難解な詩が難解に聞こえず、ポピュラーソングとして成立しているという奇跡が起こっている。

デイランが緻密な設計図のもとで、この難解な詩世界を構築したとは思えない。デイランにとっては、言葉とその響きが生み出すイメージこそが重要だったのだと思う。当時の誰も足元にも及ばないほどの語彙、言葉の選択能力、それに基づく暗喩や思わせぶりの幻想的表現を駆使して、ロックの歌詞の世界を現代詩に匹敵する文学世界に変えていった。

ディランは、自己の才能に任せて奔放に人生を切り拓いていったかのように見える。しかし、彼の生き方には、現代社会に生きる私たちにとっても役立つヒントが散りばめられているように思える。

4. 時代の変化を敏感に読み取る

ディランは、フォークソングという音楽ジャンルがしだいに時代から取り残されていくことを察知していた。ビートルズの出現以降、若者の多くは、ロックミュージックに時代の息吹を感じ、その力に希望を抱いていた。ディラン以降、多くの才能あるシンガーは、ロックミュージシャンの道を歩み、社会的な成功を収めていく。

今、若者たちは、ディランのように、自分の才能が認められるフィールドを探し求め、勇気をもって違った世界に足を踏み入れていくようになっていく。

例えば、昔ならば純文学を書いていた文才豊かな若者たちは、いつまでも純文学の世界にとどまっていけないだろう。作品世界を構築する能力を持った人たちは、ミステリーやロールプレイングゲームのシナリオを書いているに違いない。絵心があれば、漫画家になっているかもしれない。若い才能がどの分野に集まっているかは、高視聴率のドラマやヒットした映画の原作の多くがミステリーや漫画であることを考えれば

一目瞭然である。いつか歴史が評価してくれると信じて、同時代の人間には見向きもされない芸術作品を生み出していくストイックな生き方を否定するつもりはない。しかし、時代の空気を嗅ぎ取り、自分の才能が生かされるフィールドをいかに見つけるのかは、すべてのジャンルのアーティストにとって今や試金石となっている。

これは、芸術の世界に限られたものではない。消費者や取引先を相手にするビジネス界、市民の公共ニーズに応える行政の世界でも、いい仕事をしようと思えば、社会がどのような方向に動いているのかを的確にキャッチする感度のいいアンテナが必要となる。

しかし、社会の変化は速く、変化の方向を予測するのは容易ではない。経営学では、このような状況をVUCA世界(Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity, World)と表現している。状況が流動的で不確実で複雑であまいな世界において、企業の経営者は、柔軟に経営戦略を立てて生き残っていくことが求められる。

個人においても、目の前で起こっている事象に惑わされることなく、ディランのように、時代の動きを俯瞰して、自分の進むべき針路を定める必要がある。

5. イノベーターになる

VUCA世界においては、変化を敏感に

嗅ぎ取り、それに受動的に反応するだけでは生き残ることはできない。時代に翻弄されるだけに終わってしまう。ディランは、単にロックの世界に入り込んで、ロックシンガーになったわけではない。彼は、自分の力で、自らが踏み込んでいった側の世界、ロックの世界に革命を起こしたのである。

ディランは、経営学者のピーター・ドラッカーの言う意味での「イノベーター」である⁷⁾。イノベーターとは、「パラダイムシフト」を意図的に引き起こす人のことである。多くの人がそういうものだと思いついてきたパラダイムに挑戦し、人々の共通理解を自分の意志で変更していくのがイノベーションである。

卑近な例をあげると、ゆるキャラで一世を風靡した「ふなっしー」はイノベーターである。ふなっしーが出現するまでのゆるキャラの成功モデルは、彦根市の公式キャラクター「ひこにゃん」だった。全体的に丸いシェイプで、動きは鈍く、しゃべらない。自治体で作られてきたゆるキャラの多くは、このパターンを忠実に守ってきた。ところが、ふなっしーは、自治体で作ったキャラクターではなく、一市民が自主的に始めたものであり、飛んだりねたりするし面白い言葉を発して笑わせたりもする。つまり、「ゆるキャラとはこういうもの」

というパラダイムに挑戦し、ゆるキャラの可能性を広げたのである。

ディラン登場当時のポピュラーソングのパラダイムは、シンブルかつストリートに恋愛感情を表現した歌詞でなければ大衆に受けないというものだった。しかし、ディランは、政治的な内容の歌詞、幻想的で難解な歌詞をロックの世界に持ち込み、彼に影響を受けて曲を作るフォロワーを生み出した。そればかりか、その魅力によって、多くのロックファンを獲得し、聞き手の好みすら変えてしまったのである。

VUCA世界に生きていこうと思えば、私たちは、常識を疑い、柔らかな発想をもってパラダイムに挑戦し、ディランのように自分の周りの世界を自ら構成する力を持たなければならない。

6. 多様な価値を認める

空気を読むことに長け「忖度」を旨とする人間には、イノベーションを起こすことはできない。当然だと思われることを絶対視しない態度を保てる人だけがイノベーションを起こすことができる。そういう姿勢は、多様な価値の存在を認めることから育まれる。

今、サード・カルチャー・キッズ(Third Culture Kids: TCK)の研究が進められている。TCKは、例えば両親が国際結婚

をしていたり、成長期に長期にわたる海外滞在を経験していたりする子どもたちのことを言う。例えば、両親が日本人で、10代の多感な時期に親の仕事の都合でイギリスに住み教育を受けた子どもを考えてみよう。この子は、イギリス人から見れば日本人であるが、母国の日本人には外国人に近い存在として受け止められる。TCKは、母国にも育った国にも文化的なアイデンティティをもつことができな存在であり、自分の中に第3の文化を育まなければならない。日産の会長であるカルロス・ゴーン氏は、両親がレバノン人で、ブラジルに生まれ、レバノンで中等教育を受けた後、フランスのエリート大学であるパリ国立高等

鉱業学校で学んだ典型的なTCKである。最近のTCK研究では、そういった複雑な文化的背景を持った人は、柔軟に物事を発想することができ、社会的に高いポジションで活躍するケースが多いといわれている。TCKでなくても、日常的に違った文化や価値観の存在に触れる経験を多くすること、自分の信じるものを他人に押し付けたり、異質なものを排除したりする偏狭な姿勢を克服することができる。自分と似た考えを持った人たちだけで作られる閉じた社会では、知的な刺激が少なく貧しい芸術しか生み出すことができないだろう。そういう社会にイノベーションを起こそうとい

う気概を持った人は出現しにくい。

ディランは、若い頃、ニューヨークのグリニッジ界隈に出没し、最先端の思想を持った詩人・小説家・画家・写真家など、多様な視点を持つ一流の人たちと出会い交流を深めた。そういった体験が自分とは違う存在を受け入れる姿勢を育てていったと思われる。

多様な価値観を認めるということは、自分の価値観を絶対視せず相対化させることを意味する。そうすることで、自分の価値観が揺らぎ、信念が弱まると思うかもしれないが実際は逆である。自分の中に確固たる信念をもっていない人には、相手の中にある信念がその人にとってどれほど大切なものなのかを理解することができない。自分とは違った物の見方に触れることで、自分の信念は鍛えられる。

世界各国で、イスラム世界からの移民を排除しようという動きが加速化している。異質な存在をひたすら排除する社会は、長期的には国内に視野の狭い受動的な人間を再生産し、内なる危機を生み出していくように思える。

7. 自己をプロデュースする

ディランの行動を観察していると、自然に振舞っているような印象を受けるが、実はそう単純な人間ではない。彼は、自分の

姿を自分が見せたいように装っている。

ディランは、1969年に「ナッシュビル・スカイライン」というアルバムを発表した。このアルバムを聴いたファンは、そこに収録されたディランの声を聴いて唖然とする。慣れ親しんだみ声ではなく、のっぺりとした美声。独特の節回しは封印されメロディに忠実なボーカルを披露したのである。そこでファンが気づいたのは、ディランは、あのような歌い方しかできなくて、そう歌っていたのではなくて、その方が自分の書いた詞の意味や感情が伝わりやすいと考えて、あえてそういう個性的な歌い方を選択していたことだった。そして、ファンの失望を買ったことを察知すると、すぐに元のボーカルスタイルに戻してファンを安心させたのである。

ディラン本人あるいは伝記作家から、彼の人生に彩を添える様々なエピソードが発信され、ディランブランドの伝説化に一役買っている。ノーベル賞をめぐる騒動も「ディランらしさ」の計算された演出なのかもしれない。

情報が氾濫する現代社会においては、自分についての情報をコントロールしなければならぬ。自己イメージを作り上げる努力を怠ると、誤ったイメージがひとり歩きしてしまう危険に晒される。ツイッターやフェイスブックなどのソーシャルメディア

に親しんでいる人には理解できるだろうが、そこでは自分が作りたいパブリック・イメージを強調するコメントや写真・動画を積極的に発信し、イメージを壊すような情報の発信は控える。

就職活動を始めた学生たちから、自分本来の姿が企業の人事担当者に十分伝わらないという悩み相談を受ける。しかし、やがて、学生たちは、本来の自分と矛盾しない範囲で相手企業が求める人材像を演じてみせることが成功の鍵だと気づくのである。自分の価値を最大限アピールしようとする姿勢は、日本人の美徳に反するのかもしれないが、今後、ますます厳しくなっていく競争社会においては、自己をプロデュースする力が決定的に重要になっていくと思われる。

8. むすびにかえて

ディランは、今年76歳になる。たぶん今も世界のどこかのホールで、古い曲新しい曲を織り交ぜてファンたちに歌声を披露しているにちがいない。毎年のように優れたアルバムも発表し続けている彼を見ていると、創作活動に定年はないことを実感する。今後、彼は、その生き様を通じて、新しい高齢者像を示してくれるかもしれない。これからはディランから目が離せない。

- 1 時事ドットコムニュース「『古代詩人と一緒』＝アカデミー、ディラン氏創作を評価－ノーベル文学賞」2016年10月13日、<http://www.jiji.com/jc/article?k=2016101300915&g=int> (2017年3月31日閲覧)
- 2 ボブ・ディラン「全文掲載：ボブ・ディランのノーベル文学賞の受賞スピーチ」『ローリング・ストーンジャパン』2016年12月12日、<http://rollingstonejapan.com/articles/detail/27267/2/1/1> (2017年3月31日閲覧)
- 3 ライブドアニュース「ボブ・ディランのノーベル文学賞受賞に文学界から賛否『作家を侮辱』」2016年10月14日、<http://news.livedoor.com/article/detail/12143549/> (2017年3月31日閲覧)
- 4 サイ・リバコブ&バーバラ・リバコブ(1974)『ボブ・ディラン』(角川文庫)。ただし、この逸話は、伝記作家が脚色したものだとも言われている。
- 5 Rolling Stone (2006), *The 500 Greatest Albums of All Times*, Wenner Books.
- 6 John R. Ryan (2012), *Leaders Make the Future: Ten New Leadership Skills for an Uncertain World*, Berrett-Koehler Publications.
- 7 Peter F. Drucker (1974), *Management: Tasks, Responsibilities, Practices*, Harper& Row. Publisher.
- 8 David C. Pollock and Ruth E. Van Reken (2009), *Third Culture Kids: Growing UP Among Worlds, 2nd edition*, Nicholas Brealey.
- 9 多様性とイノベーションの関係については、風間規男(2016)「ダイバーシティガバナンスとイノベーション」、縣公一郎・藤井浩司編『ダイバーシティ時代の行政学－多様化社会における政策・制度研究』早稲田大学出版部、参照。